

V 学校研究のまとめ

令和5年度 学校研究のまとめ

1 研究主題「一人一人の自己肯定感を高め、主体的に活動する姿を目指して」について

教育の今日的課題及び、本校児童生徒の実態を踏まえ、「自己肯定感を高め、主体的に活動する姿」を引き出すための授業実践は、学校教育目標の達成や学習指導要領で求められている、子供一人一人の「生きる力」を身に付けさせるために大変重要で、意義のあるものである。

2 研究副題「主体的に活動するための支援や手立ての工夫」について

今年度は、研究主題である児童生徒の主体性に対し、支援方法や手立ての工夫を通じて実践的に迫ることができるように、上記の副題を設定した。どんな支援や手立てが、児童生徒の学びに対する主体性を引き出せるのか、また児童生徒一人一人がもつ学びへの主体性とはどのような姿なのか、などについて、学部内で研究小グループを作り、一人一実践を中心とした取り組みを進めた。

年間を通した計画的な授業実践を通じて、児童生徒の学びについて教員一人一人が考え、支援や手立ての工夫や精選を進め、児童生徒の主体的な学びの実現に向けた取り組みを積み重ねることができた。

(1)「支援と手立ての工夫」について、各学部の成果は以下の通りである。

①小学部の成果

i 興味関心から主体性を引き出す学習の工夫について

学習単元を構成するにあたり、題材を選ぶポイントとして児童の興味・関心の高いもの（好きな活動、キャラクター、感触遊びなどを）を積極的に取り入れるようにした。そうすることで、学習の初めから進んで取り組める児童が多く、有効であることを改めて確認することができた。

ii 学習に注目したり、盛り上げたりする工夫について

必ずしも興味関心が高い学習ばかりを行えるわけではなかったが、興味関心の高い題材以外でも、児童が主体的に取り組めるような工夫が多く見られた。学習課題の提示の仕方（児童の注目を引き付ける）の工夫、衣装やBGM、絵本の読み聞かせの雰囲気づくりなどに加えて、1単位時間内で、短い活動をモジュール的に組み合わせた学習や、内容によって活動場所を切り替えるなどの工夫も有効であった。また、興味関心の高い題材と活動方法の工夫を組み合わせることで、児童が更に学習に集中できる時間や回数などを増やしていくことができた。

iii 児童が学習の見通しをもちやすくなる工夫について

学習の中での約束や活動の順番を視覚的に提示することや、学習全体の見通しをもたせるための工夫も行った。児童に説明する際は、パワーポイントを活用することが大変有効であった。イメージしやすいように写真やイラストが入ったスライドを準備し、全員で画面を見たりクイズ形式にしたりして、注目してほしい部分を強調して伝えた。合わせて、毎時間学習の流れを同じにしたことで、児童が見通しをもって学習に臨め、自分から学習に向かおうとする姿が多く見られた。

iv 称賛場面の設定について

例えば、遊びの学習で、児童の気持ちの発信を見守りながら教師も隣で一緒に遊び、そ

の際に遊びが広がるような言葉掛けを行った。児童からの発信・反応に対しては、意識的に称賛し、意味付けしながら言葉にして返していくようにした。児童の要求をその都度受け止め、応じることを繰り返していくことで、児童の学ぶ意欲をより多く引き出すことができた。

その他、発達段階の違いに基づいた支援も行った。下学年では教材を一人分ずつ準備したり、視覚支援教材を多く活用したりして、個々のペースでじっくり遊び込むことを重点とした。上学年では、初めに完成品を提示したり選択肢から選ぶようにしたりして比べる対象を置いたり、また教師と児童、児童同士といったペアリング、グルーピングを工夫し、誰かと一緒に学ぶ場面を重点的に設定したりするなどして、児童の学びに対する主体性を引き出す工夫を行った。

② 中学部の成果

i 視覚支援の工夫について

作業学習では、製品を製作していく上での手順や約束事を視覚的に提示し、生徒が見て確認しながら作業を進めることができるようにした。視覚的に示すことで、適切な場面で確認でき、安全や出来栄えに気を付けて作業をすることができた。生徒が作業内容を理解し、見通しをもてるようにしたことで、自分から作業に向かう姿を引き出すことができた。他にも、少ない言葉掛けで作業に取り組むことができるよう、注意すべきことをイラストや文字で示したカードを、机上に提示したグループもあり、同様に生徒が自分で作業を進められる場面を増やすことができた。

ii 役割分担と興味関心を高める工夫について

学習グループ内で、生徒が役割をもつことにした。その際、生徒の人間関係を踏まえ、より意欲的に役割を果たそうとする気持ちを引き出すこと、生徒の興味関心や適性を考慮することの二点を配慮した。そうすることで、生徒が主体的に役割を果たそうとする姿が見られた。また、身近な人との関わりが多かった生徒で、初めての人と関わりをもつことのできた生徒もいた。

iii 目標と自己評価について

作業学習では、生徒自身が目標をもって学習に向かうことができるよう、学習の始めと終わりで、担当教師と目標を確認する時間を毎時間設けた。これまでの作業内容と振り返りを踏まえ、生徒と課題を共有するとともに、生徒が自分の課題や成長を理解した上で、その時間や次時の目標をもつことを大切にした。

iv 称賛場面の設定と相手意識の醸成について

様々な学習の中で、グループ内の生徒の作品などを紹介したり、がんばりに目を向けたりするような場面を意識的に設定した。仲間の前で称賛を受けることで、満足感や達成感を得ることのできた生徒が多かった。また作業学習では、製品を実際に購入する人を具体的に思い浮かべ、どんな製品だと買いたくなるか考えたり、家族に招待状を書いたり、家族から応援メッセージをもらったりしたことで、製品を受け取る相手がいることに対する意識が高まり、相手に喜ばれる製品を作ろうという意欲をもって学習に臨む生徒が多かった。

③高等部の成果

i ICT機器の活用について

作業学習では、作業の手順を動画で示したり、自分でアプリを操作して活動する授業を組んだりするなど、授業の中でタブレット端末を有効に活用した。それにより、集中して自分から興味をもって取り組む姿が見られた。一つのアプリを様々な教科等の学習で繰り返し使用することで、生徒自身が見通しをもち、自信をもって取り組む姿にもつながった。どの学年においてもタブレット端末の利用は有効であったと実感している。

ii 視覚支援の工夫について

学習内容について動画を視聴したり、授業中の映像を録画して振り返りに使用したり、説明に具体物を用いたりすることで、生徒が内容をより理解して取り組むことができた。言葉だけでは理解することが難しい生徒や、話だけを聞くことが苦手な生徒も集中して話を聞き、自分なりにイメージをもって活動することができ、上記の視覚支援を合わせて行うことで、見通しをもち、自分から学習に向かおうとする姿につながった。

iii 実態把握と適切な課題の設定について

実態把握を複数の目で行った。複数の視点で検討して本人に合った課題を設定したり、力を発揮できる学習コースを本人が選択して、段階的に取り組んだりできるように学習の構成を工夫した。自分で選択したり、成功体験を重ねたりしたことで、意欲的に学習に取り組むことにつながった。

また、生徒が興味をもって自分から取り組むための工夫として、興味関心の高い教材、ツールの選択が有効だった。作業学習では、新しい商品の開発・制作の工夫などが意欲につながった。また①と共通することであるが、生徒にとって身近なスマートフォンと類似したタブレット端末をツールにすることで、自分から操作・活動しようとする意欲につながった。

iv グルーピングの工夫

実態把握を元に、人や場の配置を整えたり、グループでの発表・称賛の場を設定したりしたことで、他の人と適切な関わりをもつことができたり、自信をもって発表したりすることができた。学習場面によって集団も変わるが、どの学習集団においても同じような手立てを取ることで、より自分から発言しようとする姿につながった。

(2) 今後の課題

学部ごと、以下の二つの視点から今後の課題について協議した。

①視点1

研究主題に迫るため、R6年度、学部や学校として児童生徒に付けたい力、求められていると考える力とは何か。

小学部

- ・ 教師や友達と一緒に活動する力
- ・ 認め合う力

中学部

- ・ 興味関心のないところでも、主体的に学ぼうとする力
- ・ 付けたい力は一人一人違う。それを見極めていくことが必要。一人一人について、目指したい姿の明確化が必要。

高等部

- ・折り合いをつける力、NOと言わない力
- ・考えて仕事をする力
- ・相談できる力
- ・活動に対して考えをもつ力
- ・勝手に進めない力
- ・「分かる、分からない」を伝えられる力（自分たちからできるように支援することが我々には求められている）
- ・自分で考える力（余白のある支援）
- ・どんなことにも対応する力

②視点2

視点1の力を児童生徒に付けるため、現在の学習計画を振り返っての課題点や改善点とは何か。

小学部

- ・子供たちの学びの見取り方（全体の見取り、個別の見取り）をどうするか。
- ・現在の学習諸計画と「学びの履歴」、記録のとり方をどうつなぐか。

中学部

- ・教科横断的視点で学習計画（カリマネ表）をもう一度見直すこと。
→「学びの履歴」に取り組んだことで、学習の偏りに気付いた。この点をみていくためには、教科横断的視点が必要となる。そこで、この研究の1年目に取り組んだ教科横断的視点に立ち戻り、現在作成しているカリマネ表を活用しながら、子供たちの学びについて見直していくことが、この研究主題に迫ることにつながるのではないか。
- ・教師の指導グループ内での、子供たちの学習課題の共有化を図ること。
- ・「学びの履歴」とカリマネ表、学習諸計画のつながりをもたせること。
- ・年間指導計画について、小単元が年間に隙間なく計画されているため、通年で取り組むべき内容の時間の確保が難しかった。単元計画と年間を通じて取り組むことの整理と再計画が必要である。

高等部

- ・進路指導、実習での挨拶（日生）、計算力を育成すること。
※高はゴールが分かりやすく、ねらえているのではないか。
- ・実態に幅のあるグループで、より実態に即した学習計画（特に国・数）を検討すること。
- ・カリマネ表と年計を見て役立てている。カリマネ表は教科の関連性が分かるため良い。
→カリマネ表と年計を1枚にできるとよいのでは。
- ・学年がまたがっている場合、それぞれの学年で年計などを作成する必要がある。
- ・進路学習の不足。（これからの生き方に触れていく学習の必要性）

3 考察

(1) 学部から挙げられた課題について

学部ごとの課題の協議で浮かび上がってきたこと（下線部）としては、「現在作成している学習計画につながりをもたせ、教科等横断的に授業づくりを進めていくこと」である。さらに本校では、2学期より「学びの履歴」作成を開始したことが契機となり、学習バランスの偏りという課題点も見えてきた。これらは、本校でカリキュラム・マネジメントにおける課題が大きいことを示している。

現在作成しているカリキュラム・マネジメント表を見ると、年間の学習内容が単元名で配置されており、構成は見やすいものとなっている。しかし、この表を教科等横断的視点で考えるとき、「育てたい資質・能力」が根拠としてあるかどうか、が重要になる。ここで言う

「育てたい資質・能力」とは、「個別の教育支援計画 様式A-3」に記載される「育てたい力」のことである。この力を付けるため、いつ、何を、どのように学ぶか、を教科等横断的に計画するのがカリキュラム・マネジメント表である。これにより各教科等の授業計画を立て、実践、評価し、「学びの履歴」により何が身に付いたかや学習の偏りが無いかをチェックしながら、年間の授業を進めていくというPDCAサイクルが、子供の確実な学びの実現では欠かせない。

これは、私たちの授業改善への取り組みでもある。「育てたい資質・能力」を明確にもつと授業の目標が明確になる。目標が明確な授業は、シンプルで子供にとっても教師にとっても分かりやすい。このような「分かる授業」の実践が積み上がることで子供の主体性が育まれ、人や教材との関りが深まることや分かることで身に付いた自信は、子供の自己肯定感を高めるだろう。カリキュラム・マネジメントに対する取り組みを進めることで、研究主題「一人一人の自己肯定感を高め、主体的に活動する姿を目指して」に、より迫っていけるものと考えている。

(2) 学習における「自己肯定感」について

初年度の取り組みとして「自己肯定感」を取り上げ、二年目である今年度はその具体的な支援や手立てについて研究を行った。「自己肯定感」は、単発の学習で育まれるものではなく、長い期間を通じて徐々に醸成されるものである。また中学部からは、課題として、一年目の教科等横断的視点へ立ち戻る必要性が挙がっていた。これは、二年間研究を進めた中で、子供の学びにおける教科等横断的視点の重要性があらためて認識されたためだと考える。学習指導要領の中でも、カリキュラム・マネジメントの充実を土台とした、バランスの良い学びの重要性が述べられている。子供が分かる授業、達成感や満足感を得る授業には、必ずそこに「なぜその学習か」という確かな根拠がある。それは子供の実態を踏まえた「育てたい資質・能力」に基づいたものであるからこそ、子供の実態に合致した、納得感のあるものになる。学校教育目標にもつながる「自己肯定感」は、その時間認められた、ほめられた、といった一時的なものではなく、長期間の学びの中で積み上がった満足感や達成感が、自分への自信となったものだと考える。

(3) 学習における「主体的」な姿について

子供が主体的に学ぶためには、授業において子供自身が何を学んでいるのかが分かること、学び方が分かることが大前提である。また、そうした授業により、どんな力が身に付いたのかを子供自身が分かることで、次の学びへの意欲が高まる。学習における主体性には、この「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何が身に付いたか」の三要素が欠かせない。まさに学習指導要領で求められていることでもある。

このような授業づくりを行う上では、各教科等で「何を学ぶか」を明確化することはもちろん、教科等で学んだことをどうつなげ、子供たちの「生きる力」としていくかが重要視されているところである。教科による学びの連続性（縦の連続性）だけではなく、教科等横断的な学びの連続性（横の連続性）があって初めて、子供にとって「生きて働く力」となり、子供が「自分から」「自分で」学ぼうとする姿につながる。子供の学びにおける主体的な姿を考えると、各教科等で着実に資質・能力を身に付けることに加え、身に付けた資質・能力をつなげて「生活で生かす」ための学びの取り組みが不可欠である。よって現在本校にある学習計画、中でも教科等横断的視点によるカリキュラム・マネジメント表がそのような子供たちの力を伸ばし支えるものとなっているかを見直すことが、子供たちの「生きて働く力」の育成につながり、主体的な姿を求める研究をさらに一段階進める取り組みになると考える。

4 令和6年度の学校研究について

(1) 研究主題

「一人一人の自己肯定感を高め、主体的に活動する姿を目指して」

研究の副題については、カリキュラム・マネジメントによる授業改善、子供中心の授業づくりにより主体的な姿を引き出していく、という内容で検討し、令和6年度の学校研究において設定する。

(2) 研究仮説

カリキュラム・マネジメントについて理解し、子供たちの「育てたい力」を明確にした上で、教科等横断的視点による授業計画を立て、授業実践を行うことで授業改善が図られるだろう。また、それは子供たち中心の「分かる」授業となり、子供たちの主体的に活動する姿が引き出され、その積み重ねにより、自己肯定感もさらに高まっていくだろう。

(3) 研究の手順

●令和6年度は、全学部、「生活単元学習」を軸として計画を作成、見直しを行っていく。

●主に研修日を使って研究を行う。

①子供の「育てたい力」について、生活単元学習ではどのような力について取り組みたいか検討する。(R6. 3月 現担任・担当)

→現在のカリマネ表に手書きで追記する。



②生単で、その「育てたい力」に迫るために、どこで、どんな学習を行うか、年間の学習計画を考える。(R6. 4月～ 新担任・担当)



③個別の指導計画、具体的な指導案を作成し、任意の時期に授業実践を行う。
(指導案等の事前検討も研修日をできるだけ活用する。)



④研修日を活用し、実践を受けての振り返りを行う。

(単元構成、学習内容の妥当性、他教科等との関連、育てたい力に対する支援や手立てがどうだったのか。この計画でよいかなどを、授業中の子供の姿から振り返る。)



⑤カリマネ表の修正や書き換えを繰り返し、「育てたい力」を踏まえたカリマネ表作りを進めていく。



「育てたい力」が踏まえられており、それに基づいたカリマネ表（教科等横断的な学習計画）になっていること、「育てたい力」に基づいた子供中心の授業が展開され、それが子供の主体的な姿や自己肯定感の醸成につながっていること、そのような授業を目指そうとする私たちの授業改善への意識の高まりが、R6年度の研究で目指したいゴール。

(5) 授業研究会

授業実践の一環として、また地域の特別支援教育のセンター的機能を果たす意味においても、校内授業研、公開授業研を実施する。実施する学部、学年等は令和6年度に決定する。

- ・校内授業研究会…令和6年 7月12日(金)
- ・公開授業研究会…令和6年12月 4日(水) ※どちらも短縮3時間時程

(6) 授業実践

- ・全学部、生活単元学習の指導グループで授業実践を行う。
- ・年1回、任意の時期に実施する。できるだけ研修日を活用し、事前研、事後研も実施する。
- ・学習指導案については、校内研、公開研を行うグループは正案、それ以外のグループは略案とする。

(7) その他

- ・全体研究会…令和6年5月1日(水)、9月10日(火)、令和7年3月5日(水)
- ・研究推進委員会…令和6年4月18日(木)、8月22日(木)、令和7年2月10日(月)
- ・外部講師招聘研修会…令和6年 7月26日(金) ※公開研修会

研修テーマ

「自立活動の理論と実践

～児童生徒の生活を支えるための授業づくり～(仮)

講師 山形大学大学院教育実践研究科 准教授 川村修弘氏

- ・カリキュラム・マネジメントに関する研修会…時期、講師は未定

5 終わりに

この主題による研究も、来年度でいよいよ最終年度を迎える。子供たちの「主体的な姿」は、いつの時代においても不易の学習課題である。令和3年度までの研究「児童生徒がチャレンジしたくなる授業づくり」で得たものを生かし、この研究はスタートした。「知りたい」「やってみみたい」という気持ちは主体性の根本的な力である。この令和3年度までの研究が温床となり、現在の研究を支えていることは言うまでもない。さらに、この2年間の研究成果をすべて糧として、最終年度に臨みたい。

平成29年4月に、この度の学習指導要領が告示されてから、早6年が経過した。すでに振り返りを過ぎたと言える。これまで、「主体的、対話的で深い学び」の実現のために試行錯誤を重ね、さらに各教科等の内容が段階的・具体的に示されたことで、教科における学びとは何か、を模索し続ける毎日であった。授業者として、「観点別の評価」や「教科等横断的視点」、「資質・能力」など、たくさんの課題がある中、それらをどうやって実現すればいいのか、また学校として何をどこから行っていけばいいのか、どうすれば学校として一歩先に進める実践ができるか、「楯特らしさって何だろう。」など、立場によって悩みは様々である。しかし、「目の前の子供たちの成長のために」「よりよい学びの実現のために」「子供たちに生きて働く力を」と願う気持ちは同じ。いろいろな立場や考え方があっても、目指すべきところは同じ。この学校研究が、その願いの実現へ向けての歩みの一つとなるよう、知恵と力を合わせて、今後も「チーム楯特」で取り組んでいくことを、切に願う。先生方、今後どうぞよろしくお願い致します。

研 究 同 人

校長 沓澤 聖 教頭 森谷 久美 教務主任 齊藤 幸司

<小学部>

柴田 和彦	三国 茉由	佐藤 香織	沖田 菜寧
齊藤 良昭	猪股 桂子	安達 莉々	齋藤みさ子
芦野 順子	野村 純子	半澤 龍	義高美千代
高橋 侑真	鈴木 詩織	安西 直美	土屋 洋貴
福田 賢	佐藤 文恵		

<中学部>

和田 朋子	中嶋あす香	折原 彩乃	西塚 友美
梶川 浩伸	石山 俊輝	小野美賀子	高久 清子
柴田 奈実	竹埜 寿紀	原田 厚子	藤田由起子
佐藤 知子	伊藤 圭一	柴崎 修	菊池 富貴
高橋 僚子			

<高等部>

木内 澄江	板垣由起子	庄司 直人	斎藤 春季
早坂 奏	松田 知也	中村 桜	加藤 万紀
古木 隆	加藤 隼	清野 芙美	本間みゆき
安達 由芳	川村 保子	前野 優太	片山 愛子
星川真由美	沓澤真由美	荒井 貴子	

<担外>

高橋 淳子	三浦 志
-------	------

研究実践集 第13号

発行日 令和6年3月31日

発行所 山形県立楯岡特別支援学校

住 所 〒995-0011
山形県村山市楯岡北町一丁目8番1号
TEL 0237-55-2994
FAX 0237-55-2990

代表者 校長 沓澤 聖